本と地域の情報誌
県北 どらくろあ
第111号　2025年6月1日（毎月1日発行）

木次（きすき）線ストロール⑭　南大東（だいとう）駅
「駅名を刻んだ記念碑と創世の三神を祀る神社」

5月18日の日曜日、五月晴れとはいかず、今にも雨が降りそうな曇天。どら書房は5月より日曜日も定休日にしたので、木次線の取材に日曜日に出掛けるのは初めてだった。

8時半頃、車で庄原の自宅を出発。沿道の田には水が張られて、田植えを終えた田も半分ぐらい。米不足で米価高騰のおり、豊作であってくれと心から願う。

いつものように国道183号線を備後落合駅の手前で左折、国道314号線を登ると、周囲の山林の、ヤマフジの花房の藤色が鮮やかになる。野フジとも呼ばれる野生種。高度による気温差で花期が遅れて、今が満開なのだろう。巨木に蔓が巻きついて、まるで巨大なフジのツリーである。ちなみに、園芸用のフジの蔓は右巻き（時計回り）で、ヤマフジは左巻きである。

2時間余りで木次駅に到着。途中、晴れ間が覗くこともあったが、小雨が降り始めている。駅の近くにある小学校では運動会が開かれていたが、生憎の天気である。

次の列車までかなり時間があるので、先月は行かなかった駅前のショッピングセンターで買い物。食品のスーパーや百円ショップ等々、さまざまなテナントが入っている。日曜日ということもあって人出も多い。フードコートで早めの昼食を済ませた。お年寄りのグループが談笑していて楽しそうだ。

駅の券売機で190円の切符を購入、木次線で券売機を利用したのは初めてだ。駅員も常駐している。11時52分発の宍道（しんじ）行きに乗車。運転手の交代による待ち時間がかなりあるので降車する人も多かったが、発車する頃にはわたしを含めて10人ぐらいの乗客、ほとんどの人が旅行客の装いだ。

市街地を抜けて田園風景を走り、5分程で南大東駅に到着。降車したのはわたしひとりだけ。一車線のホームにコンクリートブロックを積み上げた待合室があるだけの駅だった。開業は昭和38年（1963年）と、木次線では一番新しい駅である。住民の強い要望で、木次駅―出雲大東駅間に新設された。芸備線の広島・庄原市の平子駅や内名駅と同じような経緯である。

島根NEWS・WEBで配信されている「木次線18駅の物語」の南大東駅編を見たが、開業時のセレモニーの写真では、ホームが見えない程に人が溢れている。120メートルの長いホームは今でも健在で、往時には7両編成の列車が停まることもあったという。当

駅舎はなく簡素な待合室だけの"停留駅"だ

「南大東驛」と刻まれた石碑が利用客を迎えてくれる

発行：どら書房

誌面デザイン：ROUTE183
協賛：九日市愛好会